



月刊「HANAYASURI」2022年9月号（通巻6号）

表紙／沢田幹代 Mikiyo SAWADA

- P2-3 巻頭エッセイ「夏の音」相地透
 P8 観察会レポート①「小雨の中の鳴く虫散歩」相地優子
 P10 「知多半島の自然に実感をこめた南吉」遠山光嗣
 P12-13 連載「子どもが不思議と出会う時（六）」森下京子
 P16 <一枚の写真>「光彩」相地透
 P18 日常エッセイ「猫がきた」今井菜津子

- P4-7 「原体験／鳴く虫の音を聞く」相地満
 P9 「少年期の椋鳩十～生と死の二極に揺れる性格」菅沼利光
 P11 「自然のなかで踊る～現代舞踊家・野々村明子さんのお話」相地透
 P14-15 「チェイン・オブ・ライフ」相地満
 P17 詩「なんでも屋」伊藤康子
 P18 日常エッセイ「書く事」相地透



巻頭エッセイ「夏の音」

七月中旬。梅雨が明けてからも、だらだらと雨が降り続く。編集室で作業をしていると、雨の音に混じって蝉の声が聞こえてきた。「ザー……シユワシユワシユワ」。数日前の晴れ間を感じ取って出てきたのだろうか。数年間、地中で成長を続け、満を持して出てきた地上。羽化に成功するも、生憎の長雨。地上での生活は限られているのにもかかわらず。「いかでか鳴かざらむ（どうして鳴かずにいられるか）」。雨音が、鳴咽のように聞こえた。

七月三十一日。三年ぶりに蒲郡花火大会が開催されるので、夕方、名古屋から車で向かった。この日は蒲郡全域で、花火大会のために人が動く。蒲郡市内の無料駐車場にとめようと思ったが、1キロメートルほど手前から車の動きがピタッと止まる。開始まで一時間半ほどである。見切りをつけて隣駅の駅前駐車場に向かうが、こちらも満車。近隣に止めるのは無理だろうと、三十分かけて豊橋市に移動。駅前のコインパーキングは余裕があった。すぐにJRに乗る。名古屋方面からの電車は、途中からぎゅうぎゅう詰めになるが、豊橋駅は始発だからか、こちらは空いていた。各駅停車で数駅後、蒲郡駅に到着。駅舎を出て、にぎやかな人波に揺られて歩いていると、いよいよ楽しくなってくる。

駅前から徒歩数分の場所にある埠頭を目指していると、最初の花火が夜空に華開いた。「ドーン！ パパッ……」。歓声が上がると、次々と花火の音が響く中、人々は待ちわびた夜を思い思いに過ごしている。缶ビールをあげて宴会をする地元の人。スマホで花火を撮影する若者たち。子どもを肩車するお父さん。子ども用自転車を引いて歩く小学生。手をつなぐ恋人たち。笑い合う異国の人。花火を背にして深刻に話し合う人。腕にタトゥーを入れた若者。片腕のない男性。学生服姿の高校生男女。この先、ここにいるほとんどの人たちと日常生活で出会う事は無いだろう。ほんのわずか、人々の時間が重なり合う。花火を見上げる顔は、みんな明るく澄んでいる。放浪の画家・山下清の言葉が頭に浮かんだ。「みんなが爆弾なんかつくらなくて花火ばかりつくっていたら、きつと戦争なんて起きなかつたんだな」。

帰りの混雑を避けるために、早めに会場を去ろうと芝生から立ち上がったとき、草むらで一頭のエンマコオロギが鳴いた。
 八月三日。九月の観察会の下見のため、矢田川河川敷を訪ねた。夕暮れの河川敷で、夏休み中の若者が、スマホを片手に大声で話している。ランニングしている人がいる。まだ鳴く音は少ない。日没後、四十五分ほどで十種類の虫の音が聞けた。

八月七日。中央自動車道・飯田のインターチェンジを降りて、しばらく国道を走り、天竜川にかかる鉄橋をわたり、喬木村へ入る。椋鳩十記念館の駐車場に車を止めて、お弁当を食べる場所を探す。すぐ裏手の山に八幡社があったので、境内で食べる事にした。少し風が吹いていて、名古屋よりも涼しい。「ジィ……」と、蝉の鳴き声が杉の大木の上から降ってきた。音が心地よい。こちらは、ほとんどがアブラゼミで、クマゼミはいない。だからだろうか、蝉しぐれが、熱田よりも耳にやさしい気がした。

八月十三日。夕方、熱田神宮を訪ねた。「オーシ、ツクツクツク……」。ツクツクボウシが鳴いていた。夕飯前に玄関先で迎え火を焚く。植木鉢の中、炎が風に揺れた。

八月十四日。お寺さんから副住職がお盆の読経をしに来てくださった。きれいに整えられた仏壇にはチーズクッキーとおはぎが供えられている。畑をされている方から頂いた百日草が鮮やかだ。ぼつくぼつく木魚の音が響く。お参りの後、階段を上がって仏間の真上にある編集室に行くと、ネコの青葉が床で伸びていて、心地よさそうな顔で眠っていた。

八月十五日。久しぶりに南知多町の観察地へ赴く。数年前から毎月必ず訪れている雑木林は、ミンミンゼミが盛んに鳴いていた。アオスジアゲハがやってくる。コミスジもひらひらと飛んでいる。林縁ではスズメウリが小さな花を咲かせていた。

「知多半島をめぐる」と題した観察を始めてから、この八月で丸三年。たかさんの出会いがあった雑木林。かつてハンミョウと遭遇した坂を上る。前日の雨で地面は湿っている。「ワー……」。遠くでサイレンが鳴った。正午だった。立ち止まって森を見渡す。夏の緑が深い。空をおおう木々の樹冠からこぼれた光が、路の上に日溜まりをつくっていた。

路上をよく観ると、アブラゼミの翅が一枚落ちていた。褐色の翅脈が美しかった。直に蟻がやってきて、運んでいくだろう。そんな事を思い、再び坂道を上り始めた。（相地透）